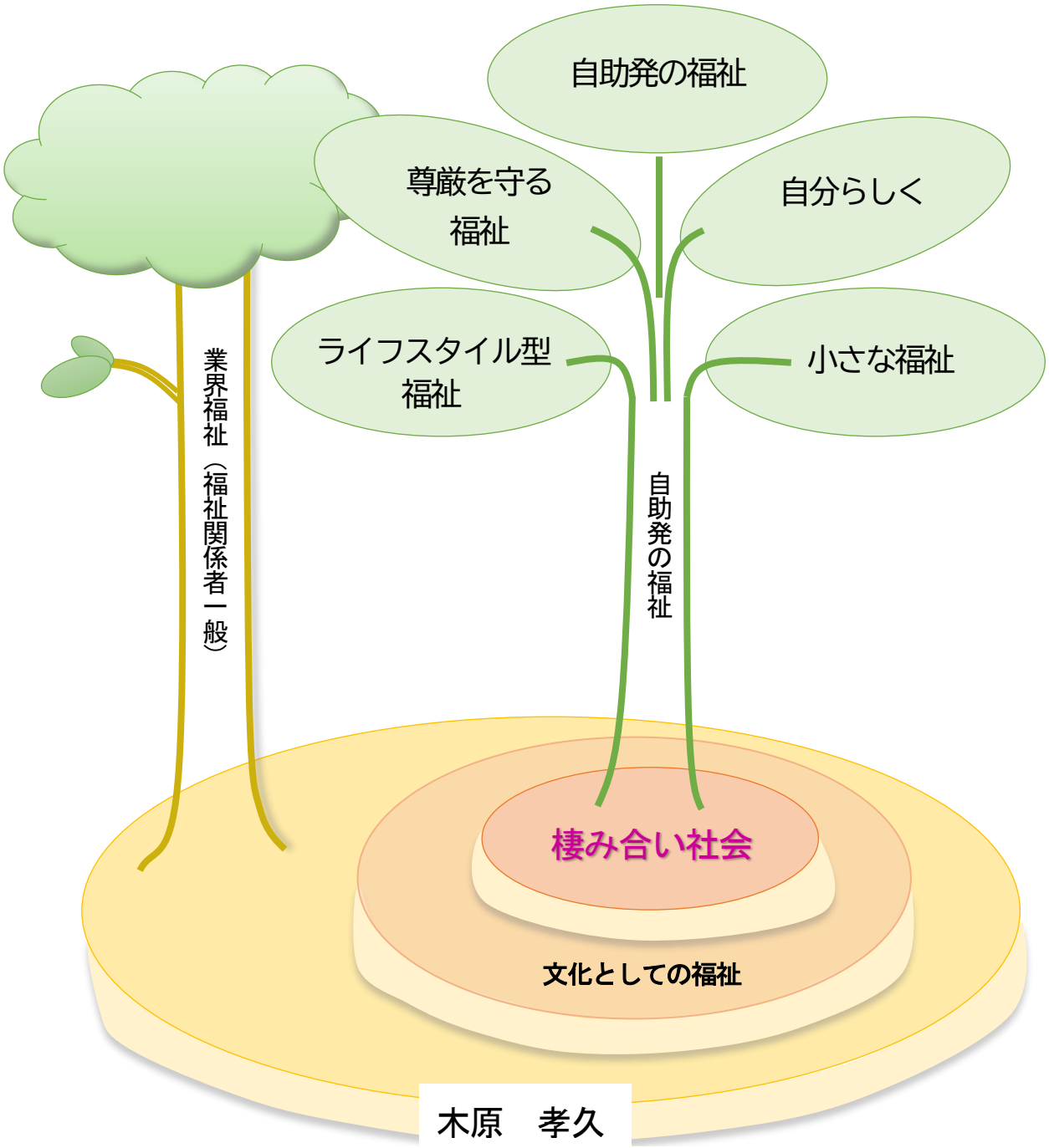
第5章

棲み分けから棲み合いへ



木原　孝久

住民流福祉総合研究所

目次

第1部　棲み分けから棲み合いへ／3
1.これで「共生社会づくり」なの？／３
2.文明は心地良さを求め、心地悪さを排除する／４
3.敢えて心地悪さを受け入れる方向へ／６
4.共棲へのさまざまな努力／９

第2部　やさしさ溢れる町にするために／13
1.日本人のやさしさは 125 か国中 125 位だった／１３
2.日本の文化を生かしたやさしさ強化作戦／１６

第1部　棲み分けから棲み合いへ

1.これで「共生社会づくり」なの？

⑴サロンは元気な人だけでやるもの？

厚労省をはじめとして、福祉を進める機関が力を入れている運動は、共生社会の実現であるようだ。しかし実情は、それとは正反対の方向にいっている。

支え合いマップを作っていた時のこと。まず、サロンの参加者に印をつける。次いで、この地区でデイサービスを利用している人に印をつける。２つの印が重なった人を探してもらったら、たった１人しかいなかった。

⑵「だから認知症の人なんか入れるんじゃなかった」

デイサービスを利用するようになると、もうサロンへは入れてもらえないのだ。そのことを問うと、「だって、私たちは元気な人の集まりだもの」。元気でない人は、それこそデイサービスなり、施設へ行けばいいというわけだ。

①介護保険が始まって以来、「棲み分け」が広がっている

介護保険が始まって以来、特に顕著になったことだが、日本人は元気な人と要援護者が別れて生活するようになっている。そのせいか、サロンなどに、たまに要介護者が入ってくると、迷惑な顔をする。認知症の人なら、もっと反発が出る。確かに、認知症の人が入ってくると、いろんなことが起きる。ある老人クラブで認知症の人を受け入れたら、バス旅行の最中などに、目を離すとどこかへ行ってしまったりする。その人を探し回るだけで、時間を費やす。「だからこんな人を入れるもんじゃないよ」といった声が出る。

たしかに大変だが、その人だってわざとやっているわけではない。その人なりに、

普通に行動しようと努力している。共生社会というのは、そういう手間や面倒を受け入れることができるかを問うているのだ。

2.文明は心地良さを求め、心地悪さを排除する

⑴こらえ性がなくなった日本人

①グループに認知症の人が１人加わっただけで大騒ぎ

最近の日本人は概して、こらえ性がなくなったように見える。先ほど述べたように、グループに認知症の人が１人入ってくるだけで、大変な迷惑をかけられているといった顔をする。

精神障害のある人が通りで大声を出したりするだけでも、大げさなくらいに迷惑がり、その人を排除しようとする。障害があるのだから仕方がないじゃないかと言っても納得しない。

②老人ホームが建つだけで環境問題？

近所に保育園や老人ホームができるとなると、すぐに反対運動が始まる。老人ホームがどのように環境問題になるのか。要するに隣に老人ホームができることが気にいらないということだろう。

⑵文明はアメニティ（心地良さ）を求める

文明は、私たちに心地よさを与えてくれる。科学技術の開発も、それに奉仕している。だから私たちは、ちょっとでも不便なこと、面倒なこと、心地悪さを感じると、科学で何とかならないものかと、つい考えてしまう。

そして不愉快なもの、心地悪いものは自分の周りから排除しようとする。それが問題だとは全く考えていない。というよりは、そういう感覚を持つことが文明人と

して当然だと思っている。

①近所に老人ホームができると知ると、反対運動が始まる

先程も述べた通り、近所に老人ホームができると知ると、反対運動が始まる。地域住民の利益にならないものは、地域に存在すること自体、住民が反対する。こうして、施設建設の反対運動は、いつまでたってもなくならない。障害者が多く雇用されるというだけで、レストランも反対運動の対象になる。

ふれあいサロンなどが要介護者を排除するのも、これらの流れの１つだろう。社会はこうして、棲み分けが進行している。共生とは正反対の動きである。

②地縁のしがらみがないからグローバルは大歓迎

もっと深刻なことも起きている。ご近所づきあいなんぞは、アメニティから遠く離れている。こんな面倒なおつきあいはご免だと、地域関係はますます薄まっていく。その点、グローバルはいい。そういう身近な関係ではなく、見知らぬ人たちと、しがらみなく交流できる。そこでは当然、濃密なお付き合いは期待できない、というよりはしなくても済むから、楽だ。

家族との関係も、厄介なことが多い。面倒をかける人や要援護状態の人、交流が苦手な人などがいて、それをうっとうしく思えば、家族からも離れていく。こうして地域には、家族からも、ご近所からも、地域グループからも離れて、孤立している人がますます増えている。孤族という言葉も広まっている。

3.敢えて心地悪さを受け入れる方向へ

⑴超高齢社会では今まで以上の助け合いを始めなければ

①何でもかんでも介護保険でとはいかない

そろそろ反対の「心地悪さ」を敢えて推奨する動きが出てきてもいいのではないか。そうでないと、これから私たちが願う社会はつくれないことになる。

これからどういう社会がやってくるのか。超高齢化社会である。いずれこの文字の「化」が消えて、超高齢社会になる。要介護者が増える。認知症の人も同様。地域に要援護者があふれることになる。

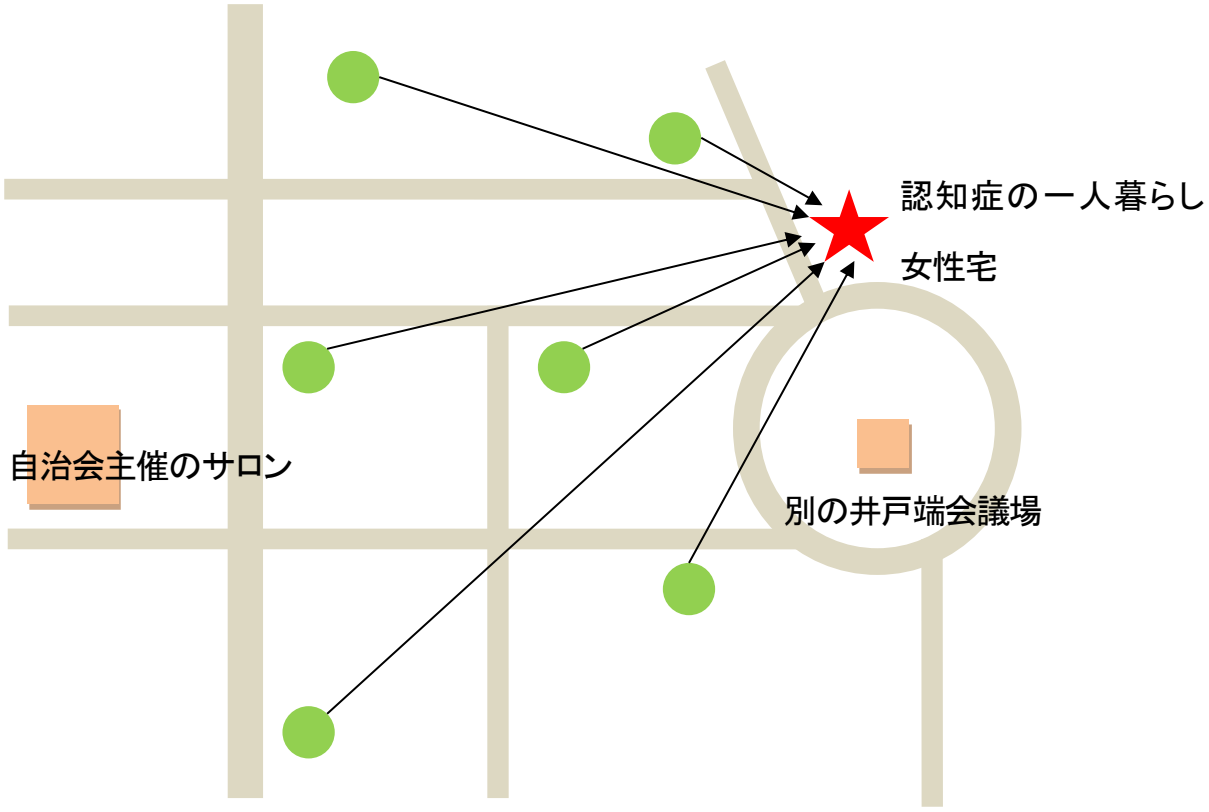
②今まで以上の密な関係作りが必要

その人たちの行動半径は狭く、ご近所が生活圏になる。そこで心豊かに生きられるようにするには、今まで以上のご近所関係をつくっていかねばならない。アメニティだなどと呑気なことは言っていられない。高齢者も含めて、今まで以上に濃密な助け合いをしないと、生きていかれない。何でもかんでも介護保険でとはいかないのは目に見えている。

それに備えるには、今から、昔のような濃密な助け合いを再び起こしていかねばならない。

要援護者の行動半径は極端に小さいから、昔以上の密な関係が必要だ。

東日本大震災では膨大な仮設住宅ができたが、今はほとんど残っていない。現地に行ってみたら、復興住宅に移ったものの、仮設の頃の濃密な助け合いが懐かしくて、また仮設に戻ってきたという例を見つけた。



⑵一人暮らし高齢者が周りの人に「うちに来ないかい？」

①自分を見守ってくれる人をこうやって確保していた

超高齢社会にこういうことが始まるかもしれないという実践例を見つけた。マップを見ていただきたい。

この界隈では、サロンが開かれている。そこに、９０代の認知症の一人暮らし女性も参加している。サロンが終わると、彼女は何人かに声をかける。「うちへ来ないかい？」。そうやって自分の家に集まった人たちとお茶のみをしている。その参加者に、参加した動機を尋ねてみたら、「見守りがてら」ですと。この高齢女性は、お茶のみを主催することで、自分の見守り手を確保していたのだ。

②家をひらいて、プライバシーにもこだわらない

助けてもらうためには、お付き合いはご免だなどとは言っていられない。この女性のように、プライバシーを主張して閉じこもるどころか、家をオープンにして人を呼び込んでいる人たちがいる。アメニティとは反対の生き方に転換したのだ。認知症の一人暮らしの高齢者が先頭を切って、共生社会づくりをはじめている。一人暮らし高齢者と言えば、すぐ「ひきこもり」という言葉がイメージされるが、やればできるのだ。

共生社会づくりは、まずこういう人たちから始めてもらうというのも、案外、理にかなっている。この一人暮らしの認知症の女性も、自分１人では生きていけない。助けが必要だ。助け手に来てもらうためには、家を開かねばならない。おつきあいが好きだ嫌いだなどとは言っていられない。こういう例が全国各地で見られる。これが１つのやり易い方法ということだろう。

③若い男女が気軽にルームシェア

やり易いと言えば、最近、若者の間でルームシェアが流行しているらしい。以前、私の身近でもあった。娘がイギリスの青年とルームシェアをすると言いだしたのだ。びっくりした私は、その青年はどういう素性なのか、いずれ結婚するのかと、先走ったことまで聞いてみたが、娘が笑い出した。「イギリスではこれが当たり前。ただルームシェアをするだけで、男女関係なんかないのよ」と取り合わない。

④プライバシーゼロの長屋でも、「心地よかった」

法政大学の学長をしている田中優子氏が、若いころ長屋に住んでいたという話を、どこかの冊子で読んだ。長屋だから、数軒がくっついている。隔てるものは襖１枚で、それを取り払ったら、子どもが 30 メートル競走ができる。隣の営みはすべて聞こえてしまう。プライバシーはゼロ。「それでは息が詰まったのではないか」とよく

聞かれるが、そんなことは全くなかったという。むしろ「委ね合っていた」とも。それどころか、長屋は保育園であり、子ども預かりセンターであり、宅老所でありと、あらゆる福祉機能を果たしていたという。

今のアメニティ志向の若者たちが、昔の密なお付き合いの社会に適応できるものなのかとも思うが、案外、人間には我々が思っている以上の柔軟性があるのかもしれない。

4.共棲へのさまざまな努力

ではその共生社会をどのようにつくっていくのか。様々な「共生」への努力の事例を、ここに並べてみよう。

⑴我慢ならない相手だが、それでも赦そう

相手を殺してしまいたいとすら思っているのに、それでも赦そう、そんな相手とも一緒に生きていこうと決意する。あるいは、赦しはしないけれども、何とか思いとどまって、一緒に同じコミュニティで生きていこうと思う。共生としては、最も厳しい決断である。

①アーミッシュは犯人の両親の家を訪れ、許すと言った

文明の利器を使わない自然の生活を守っているアーミッシュの集落で、衝撃的な事件が起きた。数名の少女が、同じコミュニティ内で暮らす非アーミッシュの青年に銃で殺され、犯人も自殺したのだ。

アーミッシュの人たちは、驚くべき行動をした。すぐに犯人の両親の家を訪れ、息子のやったことを許すと言ったのである。犯人の葬儀にも参加したし、犯人の両親を被害者の葬儀に招待した。両親は何度も躊躇したが、それでもアーミッシュの人

たちは説得を続けたのである。

②それでも２つの民族は一緒に生きていかねばならない

その後にも、こんな修復の努力が続けられていた。犯人の母親が、重傷を負った少女の介護を手伝いに通っていたのだ。体が不自由になった少女が、つらがって泣くたびに、いたたまれない気持ちになったという母親。それでも訪問は止めなかった。

共生とはつらいものである。両親にとっても、またアーミッシュの人たちにとってもだ。特にアーミッシュの人たちにとっては、これ以外の選択肢がなかったのかもしれない。宗教上の理由もあるし、事件後も、２つの民族は同じコミュニティで一緒に生きていかねばならないのだから。

このニュースが全米の人たちの心を揺さぶった。人間はここまでできるのか、まだ半信半疑であるらしい。ともあれ、人間が本当に共生をするためには、多大な努力をしなければならないということを教えられた。

⑵妹を殺したストーカーを治療してあげるよりほかにない

日本にも、本当は殺してしまいたい相手に対し、別の決断をした男性がいる。ストーカー殺人事件の被害者遺族の男性だ。

①被害者と加害者をともに救済

彼が始めたのは、「被害者も加害者も生まない社会づくり」である。ストーカー問題を抱える被害者と加害者をともに救済していこうというのだ。

この男性は、逗子ストーカー殺人事件の被害者・三好梨絵さんの兄である。「どうしたら妹を助けられたのか」と考え続けた彼は、専門家を訪ね歩き、海外の事例も調べた。その結果、「被害者を避難させる」といった対症療法だけでは被害を防ぐことはできず、もっと根本的な、「加害者を生まない仕組みづくり」が必要だという結論に至ったのだ。

②加害者のカウンセリングや治療法も研究

そして欧米の取り組みから、「加害者へのアプローチを充実させれば、事件を生み出す感情の歪みを正せる可能性がある」とわかったため、専門家の協力を得て研究会を発足し、被害者や周囲の対処法とともに、加害者のカウンセリングや治療法も研究するという。

再犯を抑止するのはよくある話だが、それからもう一歩踏み出て、犯人を治療しよう、しかも被害者と双方を救済しようという。今までになかった共生への試みである。

⑶まちの「迷惑かけ屋」を暖かく受け入れよう

マップ作りをしていたら、人に迷惑をかけまくっている女性がいるという。認知症ではない。ただ、彼女のやっていることが、相手には迷惑になっているのだ。

①明け方の５時に「ヌカミソの作り方を教えて」

例えば、明け方の５時頃にピンポーンと鳴る。何事かと玄関に行くと、彼女が立っている。用件はと聞くと「ヌカミソの作り方を教えて」。そんなことは昼間に来たらどうかと言うと、今知りたいという。こんな目に合っている人が 12 人もいた。

断ればいいではないかというと、「断れば悲しそうな顔をする」から、それもできないという。それに、あとでおすそ分けも持ってくるのだと。

これに誰も文句は言っていない。彼女だって、迷惑をかけるつもりで行動しているわけではない。

実は彼女が生活している界隈には認知症の人が数名いて、徘徊などもしている。しかし住民はそれを、特に気に留めていない。あの迷惑なことをする女性に比べたらたいしたことはないと思っているらしい。「迷惑かけ屋」さんも意外なところで地域の役に立っていた。

②「それも町の風景の一つ」として

支え合いマップを作ると、必ずと言っていいほど、規模の違いはあっても、その地区の迷惑かけ屋さんがいることがわかる。

あるご近所では、中年の男性が、ふれあいをしていたり、なにかイベントをしている所にやって来ては、ちょっかいを出す。迷惑というほどではないが、気になる。

そのご近所で福祉活動をしている人たちは、彼の扱いに苦慮していたが、ふれあいに関心があるのだろうと、ふれあいサロンに招待したり、地区のイベントなどにも誘いをかけたら、夫婦でやって来たが、それで収まったというわけではない。要するにちょっかいを出すこと自体が彼にとっては面白いのかもしれない。

東日本大震災の被災地でも、似たような人がいた。仮設住宅の庭の花をちぎったり、引っこ抜いたりする人、あちこちの電信柱に放尿をする人がいた。

こういう人たちに対し、住民が容認、または黙認しているという例がよく見られる。要するに、ちょっとした迷惑も、その町の風景の一つとして受け入れているのだ。

⑷認知症や要介護者をグループの仲間に

このことはすでに冒頭で紹介したが、今は社会全体に「棲み分け」が徹底している。まさに共生とは正反対の動きである。これも文明の影響であることは、間違いない。文明は効率を求めて、物事を分別し、同じ対象を集め、それぞれに対して十把一絡げに対応する。この分別癖が私たち住民にも身についてしまっているから、私たちもまた対象を分別しようとするのだ。

「子ども食堂」が流行しているが、これも子どもという言葉があるように、初めから分別の癖が出てしまっている。福祉用語で業種別という言葉があるが、すべてが分別の結果生まれた事業であり、施策なのだ。

第2部　やさしさ溢れる町にするために

1.日本人のやさしさは125か国中125位だった

⑴「日本は最下位」をどう評価するか？

①「あなたはこの１ヶ月で見知らぬ人を助けたか？」

英国の「チャリティーズ・エイド・ファンデーション」（ＣＡＦ）という機関が、2009年から2018年までの１０年間に、125カ国以上・130万人以上の人々を対象に、①人助け、②寄付、③ボランティア活動への参加について調査した結果をまとめたが、①の結果が衝撃的だった。

「あなたはこの１ヶ月間に見知らぬ人、または助けが必要な見知らぬ人を助けましたか？」という調査で、日本人は125ヶ国中125位、つまり最下位だったのである。

②アフリカ諸国がトップ１０に７か国も

報告書には「最も見知らぬ人を助けない国々（ワースト10）は、現在またはかつての共産主義国が占めている」とあるが、そうした国（中国やスロバキアなど）よりも日本は下だったのだ。

逆にトップ１０を占めるのは、アメリカ（３位）、イラク（８位）、カナダ（９位）、ニュージーランド（マラウィと並んで１０位）を除き、７カ国がアフリカだった。

③「日本人のやさしさって、こんなもんさ」

あちこちでこの事実をぶつけてみたら、２種類の反応があった。１つは、「もっと上の順位だと思った」、だからこの結果は意外だというもの。もう１つは、「日本人のやさしさって、こんなものじゃないの」という。どちらかといえば、後者の方が多い。私たち日本人は、元々やさしさが欠けているのではという見方である。

⑵「やさしくない日本人」の特殊事情があった

①日本人のやさしさは受け身型だった

日本のある市で「困っている人がいたら、あなたはどうするか？」という調査をしたら、「頼まれたら助ける」という人が大半を占めた。「頼まれなくても助ける」が２３％、「頼まれたら助ける」が７２％。日本人は、積極的に助ける人は少ないのだ。

②日本人のやさしさは、身内へのやさしさ

イギリスでの調査で前述のような結果が出たことについて、１つ思い当たるのは、「見知らぬ人を助けたか？」という質問が、日本人にとっては不利ということだ。日本人のやさしさは、身内へのやさしさなのだから。

「身内」と言っても、いろいろある。文字通りの身内から、「親しくなった人」という意味での身内でもある。いずれにしても、この身内でないと日本人は優しさを発揮できないというハンディがあるのだ。

③日本人のやさしさは、横並びのやさしさ

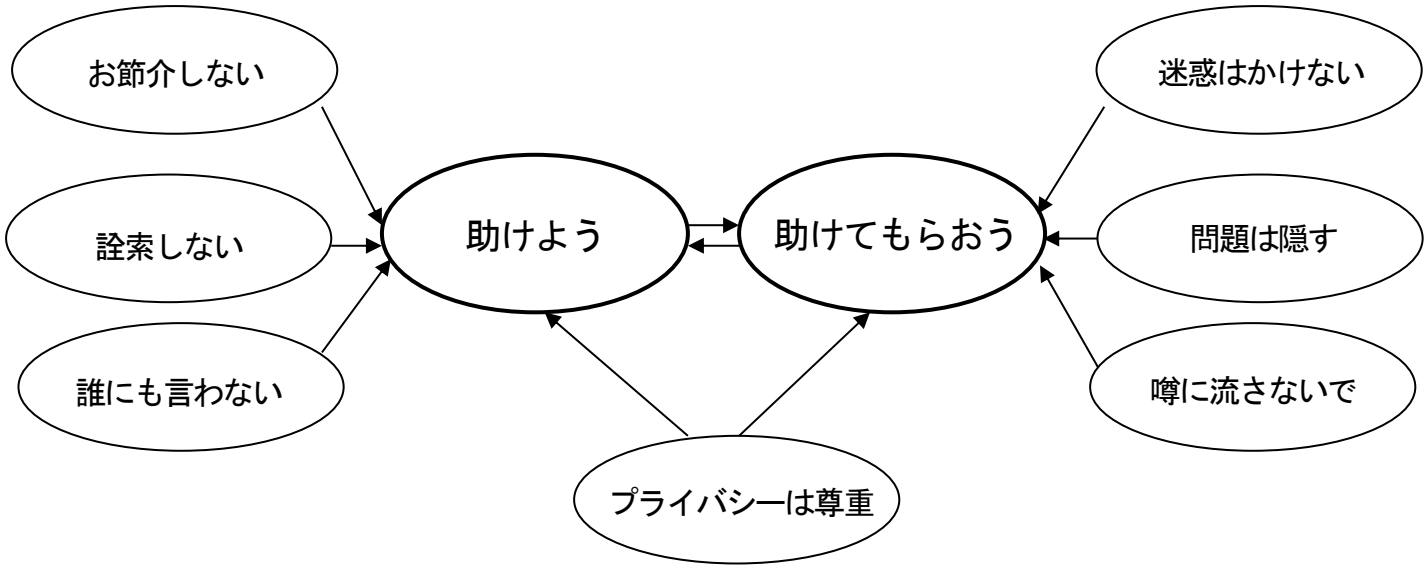
また、日本人のやさしさは、「自分１人でもやるぞ」といったものではない。みんながやさしければ、私もやさしくなるといった、横並びの善意なのだ。だから、周りがみんなやさしくなれば、自分もやさしくなりやすい。

④やさしさを発揮させない日本の風土

ここに紹介したのは、私がよく取り上げる「日本人のおつき合いの流儀」をもとに、助け合いができにくい日本の風土を整理したものだ。

助けてもらう側は、自分の問題は隠したい。一方で助ける側は、詮索やお節介をしてはいけないと抑制がかかる。その人の事情（困り事）を知らないようにしようというのだ。

また、問題を抱えている人は、そのことを噂話に流してほしくない、つまり周りに言いふらすなという。助ける側は、「誰にも言わない」、つまり「私は口が堅い」というのが自慢になる。これでは誰もその人を助けられない。



さらに、助けられる側の人は迷惑をかけたくないから、助けを求めない。助ける側は「お節介はやめよう」という。

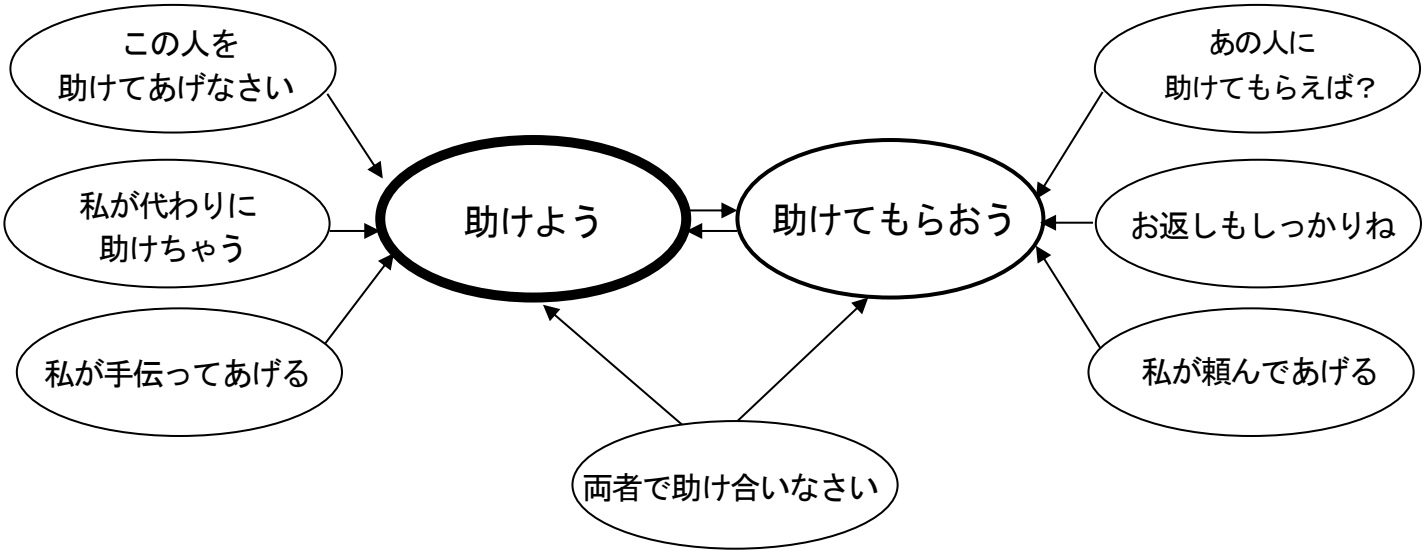
このように、担い手がやさしさを発揮する機会を、自他で抑制しているのが日本人なのだ。

⑤いろんな世話焼きさんが関わることで、「やさしさ」が発揮される？

私たち日本人のやさしさは、１人ひとりが独立して発揮するというよりも、いろいろな人の支援が合わさって、結果としてやさしさが発揮されるという面もある。

その場合に、これに関わっていると思われるのが、以下の９者である（助けてもらおうとしている人も含めて）。時と所を変えて、これらのいずれかの人材が関わってくることで、結果としてやさしさが発揮されることになるのだ。ちなみにこれらの

人材の多くが世話焼きさんと言われる人たちである。日本人のやさしさとは、いろいろな人たちの関わり合いの全体のことなのかもしれない。



2.日本の文化を生かしたやさしさ強化作戦

(1)やさしさの評価図で日本のやさしさ文化を評価

　やさしさ評価図を作ってみた。①から⑤まである。まずその解説。

①は自主的な善意か受け身の善意かということ。

②は周りを見ながら、やるかどうかを決める人と、自分１人でもやるぞという人。

③身内ならやるという人と、見知らぬ人でも助けるという人の違い。

④消極的なやさしさと積極的なやさしさ。消極的とは、積極的に相手を助ける行動にまでは出ないが、それ以前の、やさしく見守るとか、寛容な精神で対応するというぐらいならするという意味である。

⑤は見返りを求めないで助けるか、双方向の助け合いかの違いだ。

「やさしさ評価図」

①頼まれたら助ける
受け身の善意

当事者が助けられ上手になって、住民に助けを求める

進んで助ける
能動的善意

②皆がやるならやる
社内・グループ内

世話焼きさんが先導して組織内の活動を

自分１人でも

③身内なら助ける

世話焼きさんが先導して地域グループ内の助け合いを起こす

知らない人も

④消極的やさしさ
許す・我慢・大目に

積極的やさしさ
助ける

⑤双方向の助け合い
恩返し・借金返し

世話焼きさんが先導し、当事者がニーズ発信して、ご近所助け合いを起こす

見返りなく助ける

⑵日本のやさしさ文化は、世界には通用しない？

日本人のやさしさが、世界では 125 位だったということは、この図でなんとなくわかってくる。イギリスの福祉団体が求めているやさしさは、この図で言えば、限りなく右の方で、それに対して、日本人のやさしさは、限りなく左の方であることがわかる。左の方の善意を世界はたいして評価していないとみるべきなのだ。

どういうことか。①は頼まれたら助ける。②みんながやるならやる。③身内ならやさしくする。④は事実上やさしさ活動とは言いにくい。⑤は双方向の助け合いで、これもやさしさとは異なる。恩返しも、助け合いの一環と見ることができる。

⑶日本の文化をうまく生かすよりほかにない

この図全体を見ていて、このどこから日本人のやさしさを掘り起こしたらいいのか、正直なところ当惑せざるを得ない。やはり日本人は能動的なやさしさ、積極的なやさしさは苦手なようなのだ。正直に言って、この図を隅から隅まで眺めていても、これぞ日本の活路だと言えるヒントを見出すのは難しい。

そこで次善の策を考えることにした。その策がうまくいく可能性が見えるのは、その策に世話焼きさんという存在を噛ませるからである。

①頼りは世話焼きさん。この人に助け合いを牽引してもらおう

日本人はやさしくないと言われると、そんなことはないという人もいるのではないか。私は全国各地で支え合いマップ作りをして、住民と膝突き合わせて懇談をしてきた。ある懇談の席では、やっぱり日本人はやさしさが欠けていると思い、またある懇談の席では、やっぱり日本人も捨てたものではないと思う。正反対の感想が出てくる、その理由を辿っていくと、その席にたまたま世話焼きさんがいるどうかだった。以下の支え合いマップを見ていただきたい。この中に大型世話焼きさんが２人いる。また特定の１人におすそ分けをしている人、送迎をしている人などが十数

名いる。中小の世話焼きさんだ。１つのご近所、およそ 50 世帯だが、その中にこの程度がいる。いわゆるやさしさを発揮しているのはこの人たちなのだ。

そこで日本の文化で拾える部分を集約し、それを世話焼きさんに先導してもらうのである。

②受け身の善意を引き出すためには当事者が助けられ上手に

頼まれたら助けるというのなら、当事者の出番だ。自助力を発揮して、住民に積極的に「助けて！」攻勢をかけるのだ。これはご近所の助け合いでも生きる。ご近所では当事者は割合、積極的に助けを求めている。

③身内なら助けるというのならグループを身内にさせる

自分が所属する地域グループは、住民にとって身内に近い。そこで、地域グループの中で助け合いを起こさせる。その場合にも、世話焼きさんが動いてくれればやりやすい。職場でも身内意識が育つのなら、ここでも職場内の世話焼きさんを生かした身内の助け合いを起こさせていけばいい。

⑷ご近所の助け合い・世話焼きさん・助けられ上手の３点で

結局、ご近所での助け合いとそこにいる世話焼きさんの働き、それに当事者の自助力、特に助けられ上手の腕を発揮してもらうという、この３点を使いこなすしかない。

やはり期待すべきは世話焼きさんである。昔からそのことは言われているにも関わらず、この人を前面に押し出そうとはしない。日本では、肩書のある人が役割を担うという考えが抜けないのだ。しかし、実際に接して話を聞いてみれば分かることだが、世話焼きさんと普通の人とは明らかに違うのだ。この人が生かされなければ、救いはない。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451
埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷１４７６－１
TEL049-294-8284
kiharas@msh.biglobe.ne.jp
http://juminryu.web.fc2.com/